

ベルクソン哲学における「自由」について

小出泰士

はじめに

ベルクソンは、1889年に、第一の主著『意識に直接与えられているものについての試論』をアルカン社から出版した。その直後の1890年5月と10月に、ベルクソンの著書に関する長文の書評が相次いで《Revue Philosophique》誌に掲載された*¹。著者はそれぞれレヴィ＝ブリュルとギュスターヴ・ペロである。それらの書評は、今日から見れば、おおむね好意的な扱いではある。ベルクソンの主張の骨格を、これほど短期間にきちんと把握して、その主張の問題点を評者なりに的確に指摘したことに対しては、やはり敬意を表さねばならない。だが往々にしてありがちなように、彼らの考察も依然、自身の思考の枠組みに囚われ、自分で自分を制約している。ベルクソンの本来の主張を正確に聞き取る前に、自分なりの解釈を施すために、結局、批評も制約されたものになってしまう。ベルクソンのこの書におけるように、「意識の持続」という、それまでの哲学史にはない新しい概念が提出されている場合には、評者は古い革袋に新しい酒を注ごうとするがゆえに、とりわけそうなのである。

そもそもベルクソンの思想とは、生きて動くがままに意識の持続をとらえんとしたために、それを概念で定義したり理解したりすることはきわめて困難である。読者に伝達したい哲学的な直観を、ベルクソンは言葉を用いて直接表現できないために、どうしても比喩を用いたり、「～のあり方とは反対のあり方をしている」というような否定形で示唆せざるをえない。そのために、ベルクソンの思想を概念のみで把握しようすることは危険であり、またほとんど不可能であるとさえ言うてよい。だがそうした概念によってベルクソンの思想を理解しようとするこの二人の評者の試みをここで検討することは、他山の石として、逆にベルクソンの思想に関する誤解の十分な可能性を明らかにし、ひいてはその真の理解を考える上でおおいに役立つように我々には思われる。そこでこの小論では、第1節、第2節で、二つの書評におけるベルクソンの自我あるいは自由に関するそれぞれの評者の理解を順に検討し、第3節で、この二人の理解を導きの糸として、ベルクソンの自由概念の一層深い解明を目指すことにする。

1. レヴィ＝ブリュルの書評

ベルクソンは『意識に直接与えられているものについての試論』の中で、哲学史上初めて、「純粹持続」という概念を提示した。「純粹持続」というこの意識の時間的なあり方は、空間上の並置という物質のあり方とは本質的に異なる。この点で、ベルクソンの思想は、基本的にはデカルト以来の二元論の系譜に属するものと考えてよい。「純粹持続」については、次のような説明を与えている。

純粹持続とは、まさに相継ぐ質的变化でしかありえないだろう。それらの変化は、はっきりした輪郭もなく、相互に外化し合う傾向もなく、数との類縁性もなしに、溶け合い、浸透し合っている。それは純粹な異質性であろう。^{*2}

この文章に見られる通り、純粹持続する意識の特徴である「相継ぐ質的变化」を説明するために、ベルクソンは、「はっきりした輪郭」もない、「相互に外化する傾向」もない、「数との類縁性」もない、「異質性（同質でない）」と、否定による定義を連ねている。だが、「～でない」という言辞をいくら重ねても、ある対象を積極的に定義することができないことは、論理学の常識に属する。だとすれば、結局ここでは、「溶け合い、浸透し合っている」という、見方によってはほとんど無意味とも受け取られかねない説明しか与えていないことになる。しかも溶け合う前には、元来別個の要素が存在しなければならない理屈である。本当にそうなのだろうか？ このような説明では、理解せよと要求する方が無理ではなかろうか。

だが、ベルクソンのような文才に秀でた者にして、このような表現をとらざるをえなかったところに、問題の核心はあるに違いない。ベルクソンによれば、意識は時間的に連続し、時々刻々全体を質的に変容させてゆくのであるが、その意識のあり方はまさに変化そのもの、運動そのものであって、言語によって固定することができない。あるいは言語によって固定した途端に、運動を停止し変質してしまう。不変な意識、それは形容矛盾であり、もはや意識ではない。言語は意識とは正反対のあり方である、空間的、固定的なあり方を表現するのに適している。そこでまず、その空間的、固定的なあり方を言語によって表現し、次にそれを否定するという迂路を通ることによって、かろうじて間接的に、「純粹持続」という絶えず変化する意識のあり方を、彼は示唆しようとしたのだ、と我々は考える。

さて、上で引用した「純粹持続とは、相繼ぐ質的变化以外のものではありません」という記述から、レヴィ＝ブリュルは、「質的变化は予測不可能なので、現在の自我と未来の自我との間にはいかなる論理的結びつきもない。」^{*3}と推論している。こうしてベルクソンは意識から決定論を退けることには成功したが、同時に、意識の統一性を奪ってしまった、とレヴィ＝ブリュルは見る。そして、このような意識は「予測不可能な絶対的異質性」である以上、自由というよりもむしろ、不確定だと彼は批判している。だが、ベルクソンが提示している持続する意識とは、果たしてそのようなものだろうか？

まず第一に、レヴィ＝ブリュルは、ここで記憶をまったく考慮に入れていない。ベルクソンは音楽になぞらえて、意識の持続のあり方を次のように説明する。

（純粹持続するためには）自我は、先立つ諸状態を想起しつつ、それらを点と点のように現在の状態に並置するのではなく、メロディーを構成する複数の音をいわば溶け合った状態で想起する場合のように、先立つ諸状態を現在の状態と有機化すれば十分である。これらの音は相繼ぐとしても、それでも我々はそれらの音を相互に入り組んだものとして聞き、また、それらの音の全体は、諸部分が判明に区別されるとはいえ、まさに連帯性の結果として浸透し合っている生物に比べることができる、と言えるのではあるまいか。それが証拠には、もし我々がメロディーのある音を過度に強調することで拍子を乱せば、我々にその過ちを知らせるのは、長さである限りにおいての過度の長さではなく、そのことによって旋律全体にもたらされる質的变化なのである。^{*4}

ここから読み取ることのできる自我とはどのようなものだろうか？ ベルクソンの「意識」は統一性のない不確定なものだとレヴィ＝ブリュルは理解するが、むしろその反対ではないだろうか？ 意識の持続というあり方は、レヴィ＝ブリュルの考えるように、過去はすでになく未来はいまだないといった、点的現在の単なる時間的経過ではない。そこで時々刻々経験される内容は、次々と意識に蓄積される。しかも経験されるそばから自我全体に融合され、絶えず自我全体がそっくり有機化し直されてゆく。つまり、ベルクソンが意識の異質性と呼んでいるのは、こうして全体として絶えず有機化し直されている自我が、それゆえに常に異質化してゆくプロセスそのものである。過去の経験が失われてしまうのではない以上、誤解を恐れずに言えば、自我の核心部分は保たれるのではないだろうか。そこに現れる人

格こそ、ベルクソンによる人間のアイデンティティー理解である⁶。意識においては記憶が持続するために、異質性とはいえ、意識の変化はさほど大きなものとは言えないのではなからうか。なぜなら、意識全体において、新たな経験の占める割合よりもそれまでに獲得されている意識の占める割合の方が圧倒的に大きいことは言うまでもないからである。もちろん、それまでに築いた人格を一変させてしまうような革新的な出来事を経験することも場合によってはあるかもしれない。結局のところ我々は、意識の不統一を心配するよりもむしろ、経験を重ねているにもかかわらず意識がほとんど変化しないことを予想すべきであろう。その方が我々の生活実感に近いとも言えよう。

もちろんベルクソンの思想からすれば、純粹持続する意識に部分は存在しないので、核心部分や割合などという言い方は許されない。だがいずれにせよ、経験の記憶が保存されるということから、たとえ言葉の上では意識の異質性が指摘されようとも、それと同時に意識の統一性が維持されるということは不可能なことではない。というより、そのように意識の異質性と意識の統一性が共に存在するような、言語上は矛盾した事態が意識についてはありうるのだということをベルクソンは主張しているのだ、と率直に理解すべきである。こうして、ベルクソンの思想を理解する際には、言語上の矛盾に足をとられてはならない。そもそも言語を用いれば必然的に論理的矛盾を招かざるをえない対象について語り、言語では表現しえないものを言語を象徴的に用いることによって示唆しようとする手法をとっているのだからである。先に、ベルクソンの思想を概念で理解することの危険性に触れたのは、こうした事情があるためである。

次に、レヴィ＝ブリュルが指摘するベルクソン思想の難点は、ベルクソンは意識の自由を証明するために意識から決定論を排除することに熱心なあまり、意識から一切の思惟をも排除してしまった、という点である。この点が彼の批評の最も肝要な点でもある。思惟のない意識とは何か。レヴィ＝ブリュルに言わせれば、それは「純粹に感性的な意識」「流れる生の感情」⁷にほかならない。

たしかにベルクソンは、意識とは「流れつつある時間」であって「流れた時間」ではないとし、「自由は、行動そのものの持つニュアンスあるいは質のうちに求めるべきで、この行為とそれとは異なる行為との関係、あるいはこの行為と可能であった行為との関係のうちに求めるべきではない。……熟慮は動的進行であり、そこにおいては自我も諸動機自体も、本物の生き物のように、不断の生成のうちにある。直接的（無媒介的）に確認する際には決して誤ることのない自我は、自らが自由で

あると感じ、また自らが自由であることをはっきりと知らせる。」^{*7}と述べている。だが、自由な意識が論理や言語によって把握できないということから、直ちに、自由な意識とは思惟ではなく感情である、ということが結論できるだろうか。誤解してはならないことは、継起する事象の前後関係が理性的思惟によって論理的に説明できないとしても、それらの前後関係は必ずしも無意味であるというわけではない、という点である。たしかにそこには、通常の意味での論理的因果関係はないかもしれないが、だからといって、統一性のない単なる流れの感情にすぎないかと言えば、そうとは限らない。「我々が自由であるのは、我々の行為が我々の人格全体から生み出される時、我々の行為が我々の人格を表現する時、我々の行為と我々の人格が、時に芸術作品と芸術家との間に見出されるあの定義しがたい類似を示す時である。……要するに、自我から、自我だけから生み出される一切の行為を自由と呼ぶことに決めれば、我々の人格の印を帯びた行為は真に自由である。というのも、我々の自我だけがその生みの親であることを主張できるからである。」^{*8}と語られているように、まさにベルクソンの提示する自由行為とは、本人の自我からしか生まれようがない、本人の個性の烙印が押された、正真正銘の本人独自の行為なのである。原因と結果を明晰判明に特定しうる論理的因果関係でこそないものの、自我と自由行為との間には、生み出すものと生み出されるものとのきわめて密接な関係があることは明らかである。それ以前には存在していなかった真に新たなものが創造されるために、結果を予測することは不可能であるが、だからといってレヴィ＝ブリュルの言うように、意識を「流れる生の感情」にしてしまうことは、あまりにも短絡的と言わねばならない。

2. ギュスターヴ・ペロの書評

ペロもまた、ベルクソンが自由に関する一切の定義も分析も拒否するところから、ベルクソンの自由とは「自由について持つ感情」以外のものではありえない、と恣意的に理解する。ペロによれば、自由とは、自分が自由だと感じることなのである。たとえば、夢見る人、夢遊病者、精神病者、催眠術にかけられた人は、自分のことを自由に行動していると信じている。たとえ不完全な意識しか持っていないにせよ、「我々が自由だと感じるためには、我々の行為が我々の観念や感情と調和していれば十分」^{*9}だと言う。つまり、自分の意識している限りの観念や感情から自分が行動していると感じられれば、自分が自由に行動していると感じられるわけである。

では逆に、どのような時に人は自由でないと感じるのだろうか？ ベロによればそれは、自分の行為の動機の一部あるいは全部が自分に自覚されていない場合である。その時人は、何かに支配あるいは拘束されていると感じる。そこから一般に、自分の行為の動機が明晰に意識されている時、人は自由の感情を抱く、すなわち自由である、とベロは結論する。彼はこうした自分の自由の理解を決して手放そうとしない。そのために、どうしてもベルクソンの提出する自由を正確に理解しようとする態度が持てない。また当然のことながら、こうした前提からしかベルクソンの自由論を批判しえない。もっとも、そのような一定の立場をとることで、思いがけず批判対象の難点を鋭く突く場合もある。ベロの批評はおそらくそのような次第で、その後のベルクソンの思想の足取りを思い合わせれば、ベルクソン自身に心身関係をさらに深く考えさせる契機ともなったように思われる*¹⁰。

自我を様々な感覚、感情、観念の集まりと見なして、人間の行為はそれらの諸動機によって機械的、因果的に決定されとする連想主義的な自我理解を、ベルクソンは『意識に直接与えられているものについての試論』において浅薄な自我理解として退けるが、ベロはその点にまったく同意し、賞賛しさえしている。たしかにベルクソンは、純粹持続の状態にある意識について、「数とはいかなる類似点ももたず、判明に区別されない多数性すなわち質的多数性と我々の呼ぶものを形作るような仕方、メロディーを構成する複数の音のように相互に含み合い浸透し合い有機化し合っている。」*¹¹と述べることで、自我の原子論的理解に代えて自我の全体性を回復せんとした。だが、そうして自我の統一性を回復することで、部分的決定論の代わりに、一層根本的な全体的決定論を打ち立てたのではないかとベロは指摘する。

前節で見たように、レヴィ＝ブリュルは、意識の絶対的異質性というベルクソンの主張から、ベルクソンの考える意識を統一性なきものとし、したがって現在の自我と未来の自我の間にはいかなる関連性もないものと理解した。ところがベルクソンの記述から我々が確認しえたことはその逆で、純粹持続の状態においては、我々の行為は自我の全的で個性的な表現として、自我のみから生み出される、ということであった。その点では、ここでベロが理解しているように、行為は自我の心理状態全体から生じる、としたことはベルクソンの思想に適っていると言えよう。ただ問題は、それを「全体的決定論」と呼んでいる点である。ベルクソンの用語法では、決定とは、同じ原因が同じ結果を生み出す、という機械論的な因果関係を意味する。したがってベルクソンにすれば、純粹持続においてはたとえ行為が全人格から生み

出されるとしても、その動機が特定できず、しかも生み出されるものが真に新たな創造行為である以上、それを決定という言葉で呼ぶことはできない。

ところがペロは、自由とは行為の動機を明晰に意識している際に味わう感情である、というテーゼを前提としているので、さらに、行為は必ず特定の諸動機によって引き起こされる、ということもまた前提としなければならないわけである。もっとも動機のすべてが明晰に意識されるわけではない。彼によれば、この動機の自覚の度合いが自由の感情の度合い、つまり自由の度合いということになる。こうした固定観念を前提としていては、動機を特定することのできない質的に多様な自我全体から、いかなる自我が生成するかは予測不可能であるとする、ベルクソンの純粹持続する自我を正確に理解することは不可能である。

さてここに、多くの者にとって躓きの石となったベルクソン自身の文章がある。少し長くなるが引用してみたい。

行為がなされようとする瞬間に、反抗が起こることも稀ではない。表面に浮かび上がってくるのは、根底の自我である。抗し難い圧力に屈して破裂するのは、（自我の）外殻である。したがって、この自我の深層においては、つまり、合理的に並置された論拠の下には、様々な感情や観念が煮えたぎっており、まさにそのことによってそれらの緊張が高まっていたのである。それらの感情や観念は、おそらく決して無意識というわけではなかったにしても、注意を留められなかったものなのである。それらの感情や観念について反省し、記憶を入念に集めてみると、自分自身がこれらの観念を形作り、自分自身がこれらの感情を生きた、ということがわかるだろう。だがまた、それらの観念や感情が表面に姿を現わすたびに、注意を留めたくないという説明しがたい思いから、それらを我々の存在の暗い深層へと押し戻した、ということもわかるだろう。それだからこそ我々は、自分の決心の突然の変化を、それに先立つ外面上の事情によって説明しようとしても無駄なのである。我々は、どのような理由によって自分が決心したのかを知りたいと思うが、何の理由もなく、おそらく一切の理由に背いてさえ、決心したことがわかる。だがある場合には、そのことこそまさしく、最上の理由なのである。というのも、なされた行動は、その場合、浅薄で、自分にとってはほとんど関係のない、他の観念からはっきりと区別され、言葉に表現しやすいようなある観念を、もはや表現しているのではないからである。この行動が対応しているのは、自分の最も内奥の感情、考え、憧憬の全

体に対してであり、自分の過去の全経験に匹敵する特定の人生観に対してであり、要するに、幸福や名誉に関する自分の個人的な観念に対してなのである。したがって、人間が動機なしに選択することができることを証明するために、ふだんの生活のさほど重要ではない事情に、その実例を探しに行くことは間違っていた。こうしたたいして意味のない行動が、なんらかの決定的な動機に結びついていることは、容易に示されるだろう。我々が動機と呼ばれるものを無視して選択するのは、厳粛な状況において、他人に、とりわけ自分自身に与える、自分についての意見が問題である時なのである。このように明白な理由が一切ないということは、我々の自由の度合いが深ければ深いほど、それだけ一層顕著なのである。^{*12}

今日の無意識心理学にも通じる記述である。この文章で、ベルクソンは、「明白な理由が一切ない」ということを、自由行為の一つの特徴として挙げている。だがこうしたことをペロは認めることができない。彼にとっては、行為の動機の自覚こそが自由だからである。するとベルクソンの主張はその正反対ということになる。ベルクソンの思想は次第で改めて検討することにして、ここではペロの思考を追うことにする。

順に考えてみると、まず、上の文章で、ベルクソンは、ある感情や観念が意識に反抗を起こすに先立って、実はそれらが表面に姿を現わすたびに、注意を留めたくないという思いから、我々の存在の暗い深層へと押し戻していたはずだ、と注釈している。だが、ペロにとっては、不可解な衝動に従うのではなく、明晰な諸観念によって深い諸衝動を抑圧することは、自由の表現そのものである。逆に、ベルクソンが自由の最たるものとしている、人生の重大な岐路に臨んで我々が様々な合理的理由に反して実現する行為は、ペロにとっては自由が妨げられている事例である。自分に明晰に意識されていない理由から行動が起こされるので、自由というより不可解な力に強制されているという感情を伴うからである。

ペロの目から見れば、先にベルクソンが主張していた、自由行為は諸動機の合成によって決定されるのではなく自我全体から生み出されるということと、つい今し方主張された、諸動機に反して行われる行動が自由だと言われることとの間には、矛盾がある。ペロの考えでは、前者の場合には、行為は自我全体から生み出されるが、たいていの場合その諸動機は本人にすべて自覚されているわけではないという意味で、不完全に自由な決定論である。他方、後者の場合には、行為は無意識

な動機により恣意的に決定される非決定論である。どちらの場合も、行為の真の動機の一部は本人の意識には隠されている。ペロにすれば、そのように不可解な動機に練られていると感じる限り、自由な感情は持ちえない、つまり自由ではない。

だが同じ本の中で、どうして異なる二つの意味で自由について語るようなことをベルクソンがするだろうか？ ペロがそのような考えに到りついたのは、どこかに誤解があるからではなかろうか。むしろ、この二つの事例が一つに重なるような読解をこそ、我々は目指さなければならない。ところがペロは、ベルクソンのこうした矛盾を告発する。「ベルクソン氏は、相継ぐ自我の間の連帯性を、ある時は肯定し、ある時は否定して、ある時は連帯性のあることによって、ある時は連帯性のないことによって、自由を正当化する」*¹³ことを、彼は公然と非難する。ここで「連帯性のあることによって」と言われているのは、自我が自我全体から生み出される場合であり、「連帯性のないことによって」と言われているのは、不可解な動機によって行為がなされる場合である。それらはたしかに、いずれもベルクソンが自由の説明に用いていた事例を根拠としている。

このようにベルクソンの思想が困難に直面する原因は、その前提するところにある、とペロは分析する。本論文の第一節の最初に引用されたベルクソンの文章をもう一度想起していただきたい。「心理状態の漠然とした質的異質性の観念と心理状態の相互浸透の観念」が、次のように矛盾することを、ペロは指摘している。「二つの相継ぐ心理状態をたとえに類似したものと想定しようとも、もしそれらが質的に異質であるならば、その場合、魂の生は、微小な塵へと解消してしまうように思われる。そうした微小な塵においては、相継ぐ状態のいかなる結びつきも、いかなる関連も、いかなる浸透も、いかなる心的同一性もはや可能ではないように思われる。」*¹⁴ペロは、ベルクソンの根底にこうした矛盾があるために、上のようにある場合には自我に連帯性があると考え、またある場合にはないと考えるというような不一致が、ベルクソンの思想の内部に生じるのだと言いたいのである。だがどちらの場合においても、そこに矛盾を見ているのは、実は、ペロその人に他ならない。ベルクソン本人はそこに矛盾があるとは考えていない。むしろベルクソンが読者に伝えたいのは、そうした言語上は矛盾してしまう事態である。

また、ベルクソンは、自我に二つのあり方、「深層の自我」と「表層の自我」とを区別する。とはいえ、自我が二つの層から成っているという意味ではない。自我を認識する際にその諸要素を区別して認識しようとする意識の態度に応じて、それだけ自我は空間化されて認識される。本来の持続する自我が「深層の自我」と呼ば

れ、「深層の自我」の空間的表象が「表層の自我」と呼ばれる。そして、ベルクソンによれば、空間化された「表層の自我」においては、感覚、感情、観念などの諸要素が区別され、それら諸要素の機械的因果関係によって行為が生み出されるとする説明が、きわめてよく当てはまる。諸原因が特定されれば、そこから帰結する結果は、場合によっては、諸原因の合成として予測可能だからである。したがってそこに自由はない。真に新たなものの創造もない。それに対して「深層の自我」は、その諸要素が相互浸透し、経験とともに時々刻々新たな要素を取り込んでは一なる全体として有機化され、自我全体が絶えず質的に変化し続けている。ただし要素という言葉は今便宜上用いるにすぎず、実際には要素など見分けることはできない。こうした自我からなされる行為に関しては、自我全体が一つに融合しているために、行為の動機を特定することは不可能なのだが、それでもあえて言えば自我全体が原因であると言うよりほかない。こうして自我全体から生み出される行為をこそ、ベルクソンは自由行為と呼ぶ。この自由行為は、自我全体から生み出されるがゆえに、自我の個性の刻印を帯びている。したがってベルクソンによれば、このように純粹持続する「深層の自我」から行為する際に、その行為は独自なものとなり、その自我でなければ生み出すことのできない、真に新たなものの創造行為となる。その行為を生み出すものは自我自身のほかにない、という意味で、それは自我の自由行為なのである。

ところがペロから見ればこの関係はまるで逆である。ペロはこう述べる。「自由を探究しなければならないのは、「深層の自我」においてではなく、「表層の自我」において、すなわち反省された知的な自我においてなのである。」^{*15}自由とは自由だと感じることだ、とするペロにしてみれば、そう考えるのもやむをえまい。行為の動機を明晰に意識することが可能であるのは、まさしく「表層の自我」においてのことだからである。「もし我々が自らを全体として明晰に思考し、もし我々が我々自身にとっていわば水晶のように清く澄んでいるならば、その場合我々の決定は我々の存在に十全なものと我々には思われるので、我々は自由でしかありえないだろう。」^{*16}とペロは言う。だがベルクソンにすれば、自我をこのように明晰にして判明な諸要素として理解することは、自我そのものを把握することではなく、あくまで自我を空間化された記号によって機械的、便宜的に説明することにほかない。そこに、部分相互の機械的連関は見出せるかもしれないが、自由な自我の創造を見出すことはできない。

他方でまた、ペロはこう述べる。「深層の自我において、自由の代わりに自動機

構に、意志の代わりに盲目の衝動に、調和やコンセンサスの代わりに内的生命の不統一、矛盾、暗い闘争に出合う。……この深層の自我の気紛れな即興こそが、我々の予測を否認し、我々の最も決定的な結論を覆し、要するに絶えず我々の自由を妨げる。」*¹⁷彼にすれば、自分に理解できない動機によって行為へと駆り立てられるという事態は、まさに自由とは正反対である。その際、自分の意志で行為しているというより、何かに繰られているという感情を抱くからである。だがベルクソンにしてみれば、ペロがその際どのような感情を抱こうとも、自我の本体は「深層の自我」の方にある。我々の自我自体は、決して知性の理解に都合のよい仕方では存在するわけではない。我々の自我を形作っている素材は、生来の性向や過去の経験の記憶や知性等々であろうが、人間は当然のことながらそれらすべてを常に意識しているわけではない。もはや完全に無意識、無力になってしまったものもあれば、しばしば動機としては働きながらも本人にはそれと気付かれないものもある。自我全体がそのように必ずしもすべて本人に意識されることのないものであるならば、当然、自我全体によって実現される行為の諸動機のうちには本人の与かり知らないものも多くあるだろう。まさにそのように自分で意識しうる動機を凌駕して、自我全体によって実現される行為をこそ、ベルクソンは自由行為と呼ぶわけである。

そのように考えれば、自由行為の際に、自分で意識できる動機など、動機全体のほんの一部でしかない。あるいは先程の表現を用いれば、自我の代わりをする「記号」に過ぎない。真の自我とは、元来、意識が明晰に把握しきれるような対象ではない。自我全体が意識にとって把握不可能であるならば、自我全体から生み出される行為を明晰な動機によって説明することもまた不可能である。にもかかわらず、手近な動機を代用することで、自我全体から生み出される行為の説明を済ませることは、自我そのものを対象とすると称して、実は自我の記号を処理しているに過ぎない。この実物と記号の取違えは、当然、自我に関する誤った理解をもたらすことになる。その一つの実例が、まさしく哲学史上における自由の否定である、とベルクソンは考えている。

最後にペロは、もしベルクソンが「深層の自我」のうちに自由を見出すのであれば、人間としてむしろそのような自由は放棄する方がよい、と提案する。というのも、彼によれば、ベルクソンの主張する自由を見出すためには「知的思考から非反省的自発性へ、人間性から動物性へ、社会生活から個人的孤立へと後退する必要がある」*¹⁸からである。こうした表現は、J. J. ルソーの描く「社会状態」から「自然状態」への退行が念頭にあるようにも読める。いずれにせよ、ペロは「深層

の自我」を、「非反省的自発性」あるいは「動物性」ととらえている。その根拠が先に引用した文章の、「行為がなされようとする瞬間に、反抗が起こることも稀ではない。表面に浮かび上がってくるのは、根底の自我である。抗し難い圧力に屈して破裂するのは、（自我の）外殻である。したがって、この自我の深層においては、つまり、合理的に並置された論拠の下には、様々な感情や観念が煮えたぎっており、まさにそのことによってそれらの緊張が高まっていたのである。」という記述にあることは、ほぼ間違いない。たしかに、こうした自我の深層において煮えたぎっていた感情や観念を「動物性」と理解することは不可能ではない。だが同時に、ベルクソンが次のように述べていることも見逃してはなるまい。「この行動が対応しているのは、自分の最も内奥の感情、考え、憧憬の全体に対してであり、自分の過去の全経験に匹敵する特定の人生観に対してであり、要するに、幸福や名誉に関する自分の個人的な観念に対してなのである。」これが果たして「動物性」に関する記述だろうか？ むしろこれらは人間精神の最も崇高な部分をなすものとは言えないだろうか？

3. ベルクソンの自由の真意

さて、上のように、同時代の評者によってなされた批判を検討してみると、西洋哲学に共通したある特質が浮かび上がってくる。

レヴィ＝ブリュルはベルクソンの語る「予測不可能な絶対的異質性」としての自我を、「純粹に感性的な意識」「流れる生の感情」と見、「現在の自我と未来の自我との間にはいかなる論理的結びつきもない」という欠陥を指摘した。他方ペロは、行為の動機をできる限り明晰に意識することこそ自由であると考えている。そのため、ベルクソンが「何の理由もなく、おそらく一切の理由に背いてさえ決心した」行為、「明白な理由が一切ない」行為、「動機なしに選択」される行為、「動機と呼ばれるものを無視して選択」される行為こそ自由行為であると語る時、ペロはそれを承認することができない。そして彼はこうした自我を、「非反省的自発性」「動物性」と呼ばざるをえない。さて、両者のこうした理解は何に由来するのだろうか？

そのような彼らの理解の前提には、何よりも先ず、哲学創始以来の理性の偏重があるように思われる。人間の魂を理性と、感情ないしは欲求に分け、理性を人間という種に特有の神的能力と信じ、この理性能力を本来的に用いることによって人間

も真理に到達しうる、とする哲学における街学的信仰がある。逆に、理性を手放すことは、人間から動物へと退行することであり、神の似姿として創造された人間の敗北だと言わんばかりである。おそらくそのために、ベルクソンが純粹持続する自我やその特性である自由に関して、その中に論理的結びつきを見出すことができないことを述べる時に、彼らのうちにきわめて強い拒否反応が生じる。だがベルクソンの理解によれば、知性能力とは、生命進化の過程で、たまたま人間という種にすぐれて発達した一つの認識能力に過ぎない。カントの指摘を待つまでもなく、この認識能力は、万能ではない。ただし、ベルクソンは、人間は知性による以外に認識の手段を持たない、とは考えていない。ベルクソンは、人間が直観というもう一つの認識能力を用いることによって、知性には捉えることのできない意識の持続という実在を捉える可能性があると考えている。しかも、知性が対象を明晰判明に捉え、場合によってはそれを言語によって論理的に表現できるのに対して、直観については、共感により生成変化する対象を直接把握する、と言うよりほかにない。ところがすでに見たように、この直観によってのみとらえうる自我、すなわち純粹持続する自我は、それ自体知性には把握不可能な対象である、という指摘がベルクソンによってなされると、評者らは、ベルクソンの主張している自我とは、知性の対極にある「感情的」「非反省的自発性」「動物性」に他ならない、という理解へと飛躍してしまう。この短絡性こそ、それが拒否反応であることの証左である。

第二に、彼らは自我に関して、論理的な前後の結びつきしか考慮していない。つまり、行動に直接に結びつくような顕著な動機しか考慮に入れていない。だからベルクソンによって、その絆が断ち切られると、途端に彼らの考える自我は安定を失って、非理性的なものへと追放されてしまう。それに対してベルクソンの自我理解はどうだろうか？　すでに述べたように、ベルクソンの考えでは、純粹持続する自我は、過去の経験を保持している。それはもちろん、単に記録として保存していていつでも想起できるという意味ではない。過去の経験は現在の経験と、常に一なる全体として有機化されている。したがって、当然のことながら、個々の記憶は判明には意識されないかもしれない。しかしもしかしたら、姿は見えないながらもその持つ意味は実際に現在の自我に対して少なからず影響を及ぼしているかもしれないのである。このように自我を理解するならば、見かけ上論理的結びつきが失われたところで、人格の全体性は決して揺るがないことがわかる。

したがって自我は、レヴィ＝ブリュルの言うような「純粹に感性的な意識」にも「流れる生の感情」にもなりえない。ベルクソンの考える自我は、あくまで過去と

一体化した、過去の重しのついた自我である。純粹持続において、過去はもはや過去ではなく、顕在的であれ潜在的であれ、過去の一切は現在にある。たとえ「流れる生の感情」を経験しようとも、経験している自我本体はその人間がそれまで培ってきた人格の全体性にほかならず、今この瞬間に経験していることもまた、過去と一つになりつつ現在を構成する。

また、こうした人格の全体性を、ペロのように、「非反省的自発性」「動物性」と呼ぶことはできるだろうか？ 反省された自我というものは、意識に直接与えられている自我ではない。たしかにその意味では、ベルクソンの純粹持続する自我は、意識に直接与えられているがゆえに、反省された自我ではない。それは直観によって捉えられた実在する自我の姿である。それはいわば、認識する自我と認識される自我が、間に何の媒介をも介在させずに、一つのものである状態である。したがって、それはもはや認識とは呼べないかもしれない。しかし少なくとも、単なる衝動や動物性ではないはずである。人格全体には当然のことながら習慣や知性的要素も含まれているからである。

となると、ベルクソンの語る自由な自我とは、もはや通常の意味での過去と現在の結びつきもなければ、認識する自我と認識される自我との距離もない。過去も現在も、認識する自我も行為する自我も、すべてが一丸となり全体をなしている事態である。そこで今一度前節のベルクソンの文章を読み返すなら、以下のことが帰結するだろう。

ベルクソンは自由行為に関して、「何の理由もなく、おそらく一切の理由に背いてさえ、決心した」「明白な理由が一切ないということは、我々の自由の度合いが深ければ深いほど、それだけ一層顕著なのである」と述べている。ペロにしてみれば、こうして自分に不可解な動機によって行為へと駆り立てられることは、不自由の極みであろう。だがベルクソンにとっては、この場合、行為は人格の全体性からなされたのであって、理由がないのではない。あえて言えば、理由はありすぎるのである。もし理由を列挙するとなれば、それからそれへと次々と遡って行き、それでも列挙し尽くすことはできずに、結局のところ、行為の真の理由は自分のこれまでの人生の全体だとでも答えるよりほかならう。人生全体をすべて言葉に翻訳することはできまい。だから、明白な理由はない。だがそのことは、決して無意味な行為を意味するわけではなく、むしろその正反対で、人生のすべてを理由とする、意味過剰な行為だということである。したがって、ベルクソンの語る自由行為とは、人格全体からその無数の理由によって生み出される行為なのである。もつとも、自

我において理由を明晰判明に特定することは不可能であるし、したがって理由の数を数えることも不可能である以上、この表現は比喻にすぎない、という留保付きのことではあるが。こうして人格全体から生み出される行為は、人格全体の表現だという意味で、他の誰のものでもない、その当人独自の唯一無二の行為だということになる。

では一体自由行為として実現される行為の特徴は何か？ 「この行動が対応しているのは、自分の最も内奥の感情、考え、憧憬の全体に対してであり、自分の過去の全経験に匹敵する特定の人生観に対してであり、要するに、幸福や名誉に関する自分の個人的な観念に対してなのである。」とベルクソンは述べている。ここに究極の個性表現が実現されることになる。この最高の自己表現を我々は自由と呼ばなくして何と呼んだらよいのだろうか？ ここから「我々が自由であるのは、我々の行為が我々の人格全体から生み出される時、我々の行為が我々の人格を表現する時、我々の行為と我々の人格が時として芸術作品と芸術家との間に見出されるあの定義しがたい類似を示す時である。」というベルクソンの表現が生まれるのである。

さらに、ベルクソンは別の箇所、純粹持続する自我を認識することを、「力強い反省の努力によって、自己自身に立ち返る時はいつでも、我々は実在する自由な自我を知覚する」^{*19}というように表現している。したがって、ベルクソンにとって、純粹持続する自我を認識するということは、単に認識の問題にとどまるものではない。自我を直接認識することは、本来的な自己を取り戻すことでもあるわけである。ということは、ベルクソンの言う自由行為とは、自己が借り物の自己ではなく、本来の自己となること、と言い換えることもできる。ベルクソンという哲学者は普段は決して、かく生きるべきであるという言い方をしない哲学者なのだが、ここにはやはり、価値評価が含まれているように理解することもできる。というのも、非本来的な自己として生きるのと、本来の自己として生きるのと、どちらが人間にとって価値のある人生かは必ずと明らかだからである。したがって結論として、純粹持続というベルクソンの自我理解は、こうした倫理的次元までも含む思想である、とすることができる。

註

ベルクソンの原著からの引用ページ数は、次の全集による。

ベルクソン哲学における「自由」について（小出）

Œuvres : Édition du centenaire, Paris : Presses Universitaires de France, 1959.

ただし、後の括弧内に単行本

Essai sur les données immédiates de la conscience, Collection «Quadrige», Paris : Presses Universitaires de France, 1927. (略号DC)

のページ数も付した。

- *1 Lucien Lévy-Bruhl, Analyses et comptes rendus, Revue Philosophique de la France et de l'Étranger, n°29, mai 1890, pp.519-538.
Gustave BÉLOT, Une théorie nouvelle de la liberté, Revue Philosophique de la France et de l'Étranger, n°30, octobre 1890, pp.361-392.
- *2 Bergson, Œuvres, p.70 (DC, p.77).
- *3 Lévy-Bruhl, p.535.
- *4 Bergson, pp.67-68 (DC, p.75).
- *5 「実際、我々が出生以来生きてきた歴史、さらに、我々には出生前の諸性向が備わっている以上、出生に先立つ歴史もそれに含めねばならぬだろうが、そのような歴史の凝集でないとしたら、我々とは、我々の性格とは何だろうか。」 (L'évolution créatrice, Paris: Presses Universitaires de France, 1941, p.5)
- *6 Lévy-Bruhl, p.537.
- *7 Bergson, p.120 (DC, p.137).
- *8 Bergson, pp.113-114 (DC, pp.129-130).
- *9 BÉLOT, p.369.
- *10 ペロは、ベルクソンが意識を「質的進展」と規定し、それゆえに意識は保存法則を逃れるとしたことには一定の理解を示す。だがこの意識が行為を生み出す際に、力あるいは努力という概念へと、説明もなく移行する点に異議を唱える。というのも、ペロによれば、力の概念は本質的に量的なものであり、因果性のカテゴリーに属するものだからである。こうした心身二元論のかかえる難点、すなわち質的な意識がいかにして量的な行為へと結びつくかという問題を、『物質と記憶』において徹底的に説明することにベルクソンは取組んだ、と理解することができる。
- *11 Bergson, p.70 (DC, p.78).
- *12 Bergson, pp.112-113 (DC, pp.127-128).
- *13 BÉLOT, pp.388-389.
- *14 BÉLOT, p.390. ベルクソンの自我に関するこのペロによる理解は、前掲のレヴィ＝ブリ

ベルクソン哲学における「自由」について（小出）

ユルによる理解、「質的变化は予測不可能なので、現在の自我と未来の自我との間にはいかなる論理的結びつきもない。」に重なる。この点に関する最近の研究として、Jean-Louis Vieillard-Baron, *Les paradoxes du moi dans l'Essai de Bergson*, Bergson : Naissance d'une philosophie, Paris : Presses Universitaires de France, 1990, pp. 57-69がある。

*15 Bélot, p. 391.

*16 Bélot, p. 390.

*17 Bélot, pp. 391-392.

*18 Bélot, p. 392.

*19 Bergson, p. 152 (DC, p. 175).